

実態調査より

●ボランティア活動の広がり

今年度、府ボラ連では府内33の市町村ボラ連を対象に実態調査を実施しました。調査によると、ここ5、6年で活動者の年齢層は高くなっていますが、ボランティアセンター（以下VC）の登録団体数や、ボラ連への加入団体数はやや増加しています。

その傾向には2つの特徴があり、1つは演芸や音楽などの趣味的なグループが地域や施設でのボランティア活動を始めたということがわかりました。

また、社会課題（認知症高齢者を支えるための地域づくり等）に対し、ボランティア養成講座を実施し、受講生でグループを組織化するなど、VCがきっかけを作るケースが増えて

大阪府市町村 ボランティア連絡会

～結成20周年に向けて～

大阪府市町村ボランティア連絡会（以下 府ボラ連）は来年度設立20周年を迎えます。これを節目に、これからのボラ連の一層の活性化につなげていくために、今年度は実態調査の実施や、研修会等で検討を重ねてきました。

いることも確認されました。

ボラ連の事務局を担う各市町村VCとしては、ボラ連と一緒にボランティア活動のすそ野を広げていく仕掛けづくりがますます大切になってきています。

●魅力は人と情報と組織力

ボラ連の魅力は、横のつながり（顔の見える関係づくり）がで



今後のボラ連について、参加者みなさんで議論しています。

きること・ボランティア情報が得やすいこと・ボランティアの声をまとめ、社会に働きかけること（ソーシャルアクション）などがあげられました。これらの魅力をしっかりと府内全体に広げられるよう、府ボラ連としては各市町村ボラ連の取り組みをさらにわかりやすく発信していくことが求められています。

一方、課題は担い手不足やボラ連の意義に対する認識不足などがあり、研修会や調査、ヒアリング等を用いて引き続き検討を進めていく予定です。

ボランティア スキルアップ研修会

●課題から次の一歩へ

前述の調査結果からも読み取れるさまざまな課題を受けとめ、府ボラ連は12月17日「今後のボラ連と地域団体との連携」をテーマに研修会を開催しました。当日は「府民全員がボランティア活動をできるように、ボラ連としても頑張っていきたい」と、高土会長の熱のこもった挨拶で始まりました。講義では大阪教育大学の新崎国広准教授から、ボラ連の必要性、地縁型の住民参加活動と協働する意義などのお話がありました。

つながりで拓く 地域福祉実践 Vol.5

～ケース検討会議で協働の仕掛けづくり：寝屋川市～

寝屋川市社協（以下 社協）では、施設の専門職も交えた地域での新たなケース検討会議に挑戦しています。

寝屋川市では、地域ごとにまちかど福祉相談や小ネット活動を積極的に展開しています。昨今、子どもの貧困や生活困窮が注目されるようになり、市内でも、ひきこもりや障がいなど新しい課題に関する相談も増えてきています。社協では、小地域福祉活動推進事業の一環として平成10年から校区福祉委員会を対象とした「個別ケース検討会議」を開催しており、平成27年12月に、東北コミセンエリアの4校区福祉委員会のまちかど福祉相談員や福祉委員が集まってケース検討会を開催しました。

開催までの準備では、福祉委員の担当者とコミュニティソーシャルワーカーとで内容を企画し、今年度は、市障害児者を守る親の会の会長やエリア内の地域包括支援センター職員に加え、約1年前に設立された地域貢献委員会（施設連絡会）に加盟する

社会福祉法人・施設からも職員に参加を呼びかけました。ケース検討では、事例の紹介後、校区ごとに分かれたグループに地域包括職員や施設職員も入って、ひきこもりの対象者とその親に対する支援について意見交換しました。「障がいの特性は？」といった質問には専門職からのアドバイスがあり、「地域で、自分たちができることは何だろうか」とのテーマでは一緒になって知恵を絞りました。参加者から「施設につながれば終わりではなく、身近なホッとできる場が大事」「安心できる居場所づくりや仲間づくりができれば」との感想が聞かれました。小地域でのケース検討を通じて、福祉委員やボランティアと地元の専門職とが顔の見える関係をつくることで、新しい協働のカタチが見えてきています。



よりよい支援のあり方について、ワークシートを活用し熱心に議論しました。

ボランティアグループによる 防災啓発の取り組み

12月5日、校区での避難訓練や炊き出しにあわせて、富田林災害ボランティア「スクラム」による体験型の防災ワークショップが実施されました。



体育館では、メンバーが講師役となりていねいに指導しました。

スクラムは、平成26年4月に組織化され、現在約50人が登録し、毎月1回勉強会を行っています。

その中で、「今までの学びを活かし、防災の意識を広げよう」といった

メンバーの声があり、地域との協働による防災訓練に参加しました。

ワークショップの中でも、特に「ビニール袋でカップづくり」が子どもたちに好評で、ビニールに思い思いの絵を描き、オリジナルのカップづくりを熱心に取り組んでいました。

スクラム会長の塩野さんは、「子どもたちの笑顔が見られてうれしい。これからも、地域のさまざまなイベントに出て、啓発に取り組みたい」と、手ごたえとともに抱負を語ります。

今後、地域の防災をテーマに、多世代交流やさまざまな主体の学び合いが深まり、災害にも強いまちづくりが進むことを期待します。

●まとめ(大阪教育大学・新崎 国広准教授)
ボラ連の活性化に向けた具体案で印象的なものは次の6点で

続くグループワークでは、ボラ連として今後取り組んでいきたいことを話し合い、行政への提案や若者(大学等)との協働、2025年問題に対する取り組み(認知症サロンや介護者家族等が集まりやすい喫茶づくり)などの意見がありました。
また、そのアイデアを実現するために、学校関係(小中高校、大学、PTA)、地縁団体(自治会、老人会、地区福祉委員会、民生委員)、企業やシルバー人材センター、地域貢献委員会(施設連絡会)などにつながることも重要だと確認しました。

- ① 協働化を図る
- ② 新たな連携先を模索するためのwin-winの関係づくり
- ③ 行政や専門職との役割分担の明確化
- ④ 生涯学習・ボランティア学習の視点
- ⑤ 活動費の確保
- ⑥ 組織拡大のための広報・啓発活動

また、ボラ連の目的は「ボランティア同士のつながり(顔の見える)関係づくり」です。日頃は、個々人が活動に埋没してしまい、ボラ連の目的を見失いがちになってしまいます。今回の研修会で、その重要性を再確認できたことは、うれしいです。



このコーナーでは、地域福祉の実践を支える「ひと」に話を伺い、「地域での出会い(きっかけ)」や「活動のひろがり」を紹介します。

今回は、地域で活動するボランティアにボラ連について伺います。



大阪府市町村ボランティア連絡会
前会長 井上 健太郎さん

Q 会長(任期・平成21年度〜24年度)として、大切にしていたことを教えてください。
A ボラ連の認知度が低いので、まずは、若い人向けへのPRに力を入れようと思いました。

Q ボランティア活動を広げたいためのアイデアは?
A 何かボランティア活動をやりたい!と思っている人は多いと思います。例えば、大阪マラソンなどのイベントにはボランティアの方がたくさん集まりますよね。その人たちが地域での活動(ボラ連等)につなげていくことができれば良いですね。たとえば、世代間によってボランティア活動の

最近ではインターネットで情報収集を行うことが主流となつていきますので、ボラ連としてSNSを積極的に活用することができるようになりたいという意識がありました。
また、社会の流れに合わせて、社会起業家や住民参加型在宅福祉サービス団体などと連携できることも模索しました。
二ーズは異なると思いますので、市町村単位のボラ連だけではなく、大学生限定・年代別のボラ連など、年齢や活動状況などに合わせた多様なボラ連があっても良いかもしれません。
それらを市町村ボラ連が後押しすることができれば、学生や現役世代の方々も地域でのボランティア活動につながるりやすくなると思います。
また、行政への活動の魅せ方も大切です。ボランティア活動のすそ野を広げていくためには行政のバックアップ(財源など)は必須です。VCと一緒に、ボランティア意識の向上、福祉教育などを積極的に実施していくとともに、行政に提案(ソーシャルアクション)をしていくことも不可欠だと思います。
Q 設立20周年に向けて一言お願いします。
A いま、高土会長のリーダーシップのもと、改めてボランティアの原点を中心に議論され、数年ぶりに実態調査も行われました。新しい動きへの対応と原点を上手く組み合わせて、20周年を迎えることができましたらいいですね。